

【研修報告】

ラジオによる禁煙キャンペーン「キック・シガレッツ」

—国際学会での発表を終えて—

川 根 博 司*

はじめに

諸外国において、マスメディアによる喫煙防止キャンペーンや禁煙キャンペーンの有効性が報告されている (Farrelly, 2003)。わが国ではテレビなどの特別番組として禁煙が取り上げられることはあっても、放送メディアによる継続的な禁煙キャンペーンは最近まで行われていないようである。

筆者は2002年の世界禁煙デー (5月31日) から2003年3月末まで毎週金曜日に、地元放送局 RCC ラジオの朝の番組の中で繰り広げられた「聴きなからやめる禁煙キャンペーン『キック・シガレッツ!』」にご意見番として40回近く生出演した。この途中経過は「全国初のラジオによる禁煙キャンペーンを実施して」という演題で第87回日本内科学会中国地方会 (2002年11月9日, 岩国) で中間報告した。今回、その禁煙キャンペーンの経験と成果を、オーストリア・ウィーンで開催された第13回欧州呼吸器学会年次集会 (The 13th Annual Congress of European Respiratory Society) において口演する機会を得たのでここに紹介する。

対象と方法

中国放送「おはようラジオ」は月曜日から金曜日の朝6:55~9:00に放送される情報番組であり、広島県全域および周辺の県の一部で聴取できる。このRCC ラジオ番組で、2002年5月31日の世界禁煙デーから禁煙キャンペーンが開始されることになり、筆者はアドバイザーとして毎週金曜日に電話出演することが決まった。アナウンサーが5月31日の1週間前より番組中にキャンペーンの案内をして、禁煙に挑戦する参加者を募集した。リスナーからの登録申し込みは、すでにタバコをやめている禁煙サポーターや途中参加者も含めて最終的に134名となったが、5月31日に禁煙を開始 (宣言) した人は75名であった。禁煙キャンペーンの内容は、喫煙の害や禁煙の利益、具体的な禁煙方法のほか、タバコ問題、リスナーからの質問への回答などさま

ざままで、アナウンサーと毎回5~8分ほど電話を通して話し合った。

結果および考察

毎週金曜日の放送には大抵は大学か自宅から電話出演したが、学会や講演で出張した際は現地に電話をつないでもらって生放送を行った。9月13日にはストックホルムで開催された第12回欧州呼吸器学会に出席するためコペンハーゲンに滞在していたので、ホテルの部屋から学会での発表内容 (Kawane, 2002) や北欧の喫煙事情を海外リポートして、番組に彩りを添えた。また2002年最後の放送日となった12月27日には、2002年タバコ問題5大ニュースを選んで発表した。番組では簡単なコメントを挟みながら5位からカウントダウン方式で進行したが、5位: タバコ税増税 (1本1円値上げ) 決定, 4位: WHOの「たばこ規制枠組み条約」政府間交渉, 3位: 「禁煙推進議員連盟」の結成, 2位: 和歌山県の学校敷地内全面禁煙, 1位: 千代田区の「路上禁煙条例」一を選定した。ラジオによる禁煙キャンペーン参加者へのアンケート調査で、1位は同じく千代田区の禁煙条例であったが、3位にこの禁煙キャンペーン放送が入っていたのは、キャンペーンを実施するわれわれの励みになった。

筆者らが禁煙キャンペーンを開始した5月31日は、日韓共催の2002サッカーワールドカップがちょうど開幕 (キックオフ) した日でもあるが、それに合わせて「キック・シガレッツ!」と名付けたわけである。ちなみに、英語で“kick the habit”という大麻・喫煙などの悪習を断つことであり、“kick cigarettes”はタバコをやめることを意味する。そして、2002年世界禁煙デーのテーマは「たばこことスポーツは無縁 (無煙) ですーきれいにやろう!」であった。5月31日に禁煙を開始した75名のうち、3ヵ月経過時に禁煙を継続していたのは16名 (成功率21.3%) であり、その後1名脱落して15名に減ったので6ヵ月後の禁煙成功率は

* 日本赤十字広島看護大学 kawane@jrchn.ac.jp

20.0%となった。禁煙キャンペーン期間中は番組のホームページに書き込みができる掲示板が作られており、400通以上のメール投稿があったが、禁煙できた喜び、禁煙挫折者へ再挑戦の励まし、禁煙成功のコツ、職場での受動喫煙の悩み、医療従事者の喫煙に対する意見など多彩な内容であった。2003年3月末の禁煙キャンペーン終了時でも前述の15名は禁煙を続けており、10ヵ月後の禁煙達成率は20.0%であった。

筆者が行ったようなラジオによる禁煙キャンペーンはわが国で初めてであるが、海外文献を検索しても見当たらないし、学会発表の場に世界各国から出席していた人たちの意見でも今までにない試みのようであった。6ヵ月後の禁煙成功率が20.0%という値は、医療機関の禁煙外来などにおいては必ずしも高いとはいえないが、筆者らの場合は対象がラジオの一般聴取者であることから満足すべき成績であろう。毎回生放送で出演する筆者の負担も大きかったが、民放でありながらスポンサーなしに10ヵ月も禁煙キャンペーンを継続できたのは、アナウンサー・本名正憲氏やディレクター・増井威司氏が番組リスナーへの禁煙啓発に前向きであったことが大きい（写真1）。このような禁煙キャンペーンを全国的に継続して展開するには、資金、人材、主催者（推進団体）、放送局経営陣の意向など問題点が多く、いろいろ困難が予想される。しかし、今後わが国においても、未成年の喫煙防止や喫煙者への禁煙キャンペーンがマスメディアを利用してもっと積極的に実施されることが強く望まれる。

なお、第13回欧州呼吸器学会年次集会で発表した演題の要旨は、学会誌・増刊号に英文抄録が掲載されていることを記しておく（Kawane, 2003）。

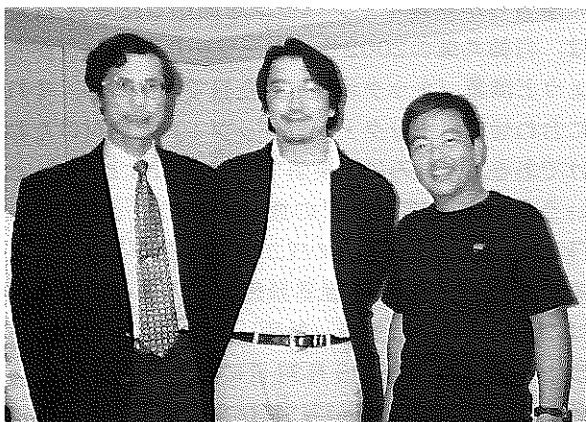


写真1 放送の行われるRCC第3スタジオにて
（左から筆者、増井氏、本名氏）

おわりに

第13回欧州呼吸器学会は2003年9月27日から10月1日にかけて、ウィーンの北東に位置する国際会議場で開催された。今回の学会へは14,800人以上の参加者があり、同年に世界中で開かれた呼吸器関連の学会のなかで最大のものだったという。欧州呼吸器学会は以前からノンスモーキング・ポリシーを掲げているが、今回も学会場の建物内はすべて禁煙であった（写真2）。



写真2 学会場入り口にて
（会場内禁煙を知らせるポスターの右上に、
クリムト作「成就」の一部が描かれている）

ウィーンは音楽の都・芸術の都として有名であるが、ウィーンを代表するコンサートホールの1つであるコンツェルトハウスで、学会により主催されたヨハン・シュトラウスの名曲を中心としたクラシックコンサートを聴きに行くことができた。学会の合間には美術館巡りを楽しんだが、美術史博物館ではルーベンス、プリュージェル、レンブラント、フェルメールなど巨匠の作品の数々を堪能した後、館内にあるゲルストナーという洒落た雰囲気のカフェでお茶と軽食を摂りながら余韻に浸った。作品が学会のポスターやパンフレットなどに使われたクリムトの代表作「接吻」が展示されている19/20世紀絵画館はベルベデーレ宮殿内にあるが、クリムト、シーレのほかにゴッホやルノワールの秀作も置いてあった。

また、ウィーンは医学、物理学、生物学などの分野でノーベル賞受賞者を輩出した学問の街でもある。ドイツ語圏最古の伝統を誇るウィーン大学の中庭回廊には、多くの著名な学者たちの胸像が並んでいる。精神分析学の創始者のフロイト、胃切除術に名を残すビルロートの胸像や、産褥熱を解明して消毒法の先駆者ともいえるゼンメルワイスのレリーフ

像を見つけ、それらの前に立って記念撮影をした。帰国後に出来上がった写真は、早速1年生への講義「医療の本質」で供覧して、授業に役立たせることができた。市内観光では、ハプスブルグ家の夏の宮殿として建てられたシェーンブルン宮殿が名前のとおり美しく魅力的だったが、バスツアーのため見学に十分な時間が取れなかったのが心残りである。

謝 辞

今回の国際学会に出席する機会を与えて下さいました本大学および関係者の方々に感謝いたします。

文 献

- Farrelly, M.C., Niederdeppe, J., Yarsevich, J. (2003). Youth tobacco prevention mass media campaigns ; past, present, and future directions. *Tobacco Control*, 12, i35-i47.
- Kawane, H. (2002). Recent attitudes of the Japan Medical Association regarding smoking control. *European Respiratory Journal*, 20, 611s.
- Kawane, H., Honna, M., Masui, T. (2003). Smoking cessation campaign "kick cigarettes" on the radio. *European Respiratory Journal*, 22, 166s.